

大正十一年九月助教となり、写真実習を担当。

因みに、以上のうち戸塚暢夫は製版科の、畑保之は臨時写真科の、久米福衛は西洋画科の卒業生である。

鎌田弥寿治の転任には臨時写真科の移管問題がからんでいた。それについて、彼は次のように記している。

帰朝した時「大正十一年四月」、東京芝浦には前述の官立東京高等工芸学校が、生れたばかりの瞬間であって、私は上野の美術学校にあった写真科の施設やら、専任の教職員等々の全部を引き具して芝浦の新校へ移る筈であったが、ここにまた一種のトラブルが起り、美校の写真科の代りに、美校に数年前から存在して居った製版科（この事に就いては後に述べる）を引^{（き）}を具して、新校芝浦に移り、私も新校の教授となり、芝浦校内には製版科の名を改めて、印刷工芸科という名によって独立した科が生れ、私はその科の科長を命ぜられた。

ただし、暗々の裏に、美校に残した写真科もやがて芝浦に引き取り、芝浦の印刷科と共に、芝浦で育成、永久に継続せしめることは、内々には決定して居ったのである。そして両三年遅れて、美校の写真科は芝浦の私の所に、その施設並びに職員等全部が移管されて来た。要するに予定通りに美校写真科は芝浦の東京高等工芸学校に移管されたのである。

（『日本写真教育史』鎌田弥寿治著。昭和五十年、東京写真大学短期大学部出版部）

これによって臨時写真科の移管をめぐる何らかのトラブルが生じ、移管にさき立って鎌田が転任したことがわかる。

その外に大正十一年八月には本校彫刻科教授畑正吉が、十一月には同金工科教授の神矢教親がともに新設校教授へと転任した。

⑦ 工芸部生徒成績展覧会

工芸部は大正十一年三月二十五、二十六、二十七日の三日間、卒業製作展覧会に合わせて第一回成績展覧会を開催し、授業成績の作品を展示した外、即売品を展示し、記念絵葉書を発行し、喫茶店を設けるなどして一般の観覧に供した。好評であったため、以後この催しは恒例となり、大正十三年春に震災の余波で休止した外は毎年開催した。第二回展では入場者約七千人、売約千六百円という盛況を呈し、毎年概ね同程度の成果をあげた。第三回展以降第七回展までは『東京美術学校校友会月報』にその概況報告が掲載されているが、それ以後は何ら記載が無いので廃止された模様である。

⑧ 津田信夫の在外研究

鑄造科教授、主任兼理事の津田信夫は大正十一年十月十三日に文部省より鑄造術および金工術研究のため満二年間アメリカ、フランス、イタリヤ在留を命ぜられ、翌十二年一月十八日に出発した。津田は明治八年十月二十三日に千葉県印旛郡佐倉町に生まれ、同三十三年本校鑄金科を卒業し、同研究科で学んだ後、同三十四年四月本校雇となった。以来助教（同三十五年一月）、教授（大正八年十一月）となり鑄造教育に尽くしただけでなく、本校依頼製作におけ